

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00520

研究課題名(和文) 明治期における東アジア漢字音対照研究の検証と日韓台漢字音変遷の比較

研究課題名(英文) Verification of the Contrastive Research of East Asian Kanji Pronunciations during the Meiji Period and Comparison of Kanji Pronunciation Changes in Japan, Korea, and Taiwan

研究代表者

中澤 信幸 (NAKAZAWA, Nobuyuki)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30413842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：1907年刊『日台大辞典』の「緒言」における東アジア各漢字音の対照部分について、データベース化を行った。ここから「緒言」の各漢字音について、ジャイルズ(H. A. Giles)『A Chinese English Dictionary』等、「緒言」が典拠とした文献との照合を行い、この「緒言」の対照研究の有用性について検証した。また、このデータベースに「緒言」がやはり典拠としていた江戸時代の太田全斎『漢吳音図』の内容も追記した。そしてカールグレン(B. Karlgren、高本漢)の『Etudes sur la Phonologie Chinoise』(『中国音韻学研究』)との対照も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

台湾の国際学術シンポジウムで口頭発表を行い、『日台大辞典』の編纂者である小川尚義における、江戸時代の漢字音研究からの影響関係も重要である、また後世のカールグレンとの影響関係についても、考察すべきであるとの知見を得た。次に日本の学会でポスター発表を行い、ジャイルズ、「緒言」、太田全斎、およびカールグレンの影響関係についてあきらかにした。またジャイルズが典拠としていた山東直砥『新撰山東玉篇英語挿入』との影響関係についても指摘した。これに加えて、韓国の学会でも口頭発表を行い、ジャイルズおよび「緒言」の朝鮮漢字音、およびジャイルズが典拠とした『全韻玉篇』との関係についてあきらかにした。

研究成果の概要(英文)：We converted the contrastive parts of various East Asian Kanji pronunciations in the “Introduction” of “Nichi-Tai Daijiten”, which was published in 1907, into a database. From this, we cross-referenced each Kanji pronunciation in the “Introduction” with sources such as H. A. Giles’ “A Chinese-English Dictionary”, which the “Introduction” cited, and we verified the usefulness of the contrastive research in the “Introduction”. Additionally, we added the contents of “Kango-onzu” by Ota Zensai from the Edo period, which was also cited in the “Introduction”, to the database. Furthermore, we contrasted the “Introduction” with “Etudes sur la Phonologie Chinoise” (Studies on Chinese Phonology), which was edited by B. Karlgren.

研究分野：日本漢字音研究史

キーワード：日台大辞典 日本漢字音 中国語諸方言音 朝鮮漢字音 台湾語音 H.A.Giles B. Karlgren 山東玉篇

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

かつての東アジアの「漢字文化圏」では、漢字・漢語が共通語として機能していた。その名残として、現在も日本語・韓国語（朝鮮語）ともに多くの漢語（字音語）が存在する。

日本漢字音、特に呉音・漢音は、中国の中古期（六朝～唐代）の発音を母胎としている。例えば、中古音には入声韻尾（-p, -t, -k）が存在した。これらは現代中国語標準音（北京語音）では消滅しているが、日本漢字音では「一チ、一ツ」「一キ、一ク」という形でその特徴を残す。これら入声韻尾は現代韓国漢字音（朝鮮漢字音）、また台湾で話される台湾語（閩南語）にも見られる。すなわち、これらの漢字音もまた中国語中古音を母胎としており、（現代北京語音では消滅してしまった）中古音の特徴を共通して保存しているのである。そのため、この三者には近似した発音の漢語が多い。例えば「大学」（日本：ダイガク、韓国：대학 テハク、台湾：tāi-hák タイハク）のように。現状では、互いの母語に存在する漢字音の共通性が言語研究に生かされることは少ないのであるが、これら日韓台漢字音に共通する特徴を生かせば、かつての「漢字文化圏」のように、漢字・漢語を単語レベルでの共通語として機能させ、相互コミュニケーションを促進させることにつなげることが可能となるのではないかと。また、共通の母胎を持つ言語音の変遷過程を比較することで、言語が変化するメカニズムを解明することが可能となるのではないだろうか。

実は、この漢字音の近似性に着目した対照研究が、はやく明治期に行われていた。それが 1907（明治 40）年に刊行された『日台大辞典』である。本書は台湾総督府の編修官だった小川尚義（1869～1947、後に台北帝国大学教授）主編の、日本語・台湾語対訳辞書である。この冒頭「日台大辞典緒言」（全 212 ページ）は、台湾語音とその他中国語諸方言音（閩語、客家語、粵語、呉語等）、日本漢字音、朝鮮漢字音、ベトナム漢字音等とを対照させた精緻な記述となっているが、これは現在の言語学界ではあまりにも知られていない。現代中国諸方言音や日本、朝鮮、ベトナムといった外国借音を利用した中国語中古音の音価推定としては、スウェーデンの言語学者・カールグレン（Bernhard Karlgren, 1889～1978）の *Études sur la Phonologie Chinoise*（1915～1926、『中国音韻学研究』）が著名であるが、それに先立つ時期に『日台大辞典』によって東アジア漢字音の対照研究が行われていたことは、まさに中国語研究史上でも特筆すべき事実であり、もっと学界でも知られるべきことではないか。

一方、漢字音の記述研究は、20 世紀後半から 21 世紀にかけて、飛躍的に進展した。日本の研究としては、日本呉音については小倉肇（1995）『日本呉音の研究』（新典社）、小倉（2014）『続・日本呉音の研究』（和泉書院）、日本漢音については佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院）がある。朝鮮漢字音については河野六郎（1968）『朝鮮漢字音の研究』（『河野六郎著作集 2』）所収、平凡社）、伊藤智ゆき（2007）『朝鮮漢字音研究』（汲古書院）があり、台湾語音については王育徳（1987）『台湾語音の歴史的研究』（第一書房）がある。いずれも中国語中古音との対比から、その歴史的変遷を問う研究である。もちろん、中国、韓国、台湾でも研究の蓄積があるが、これらの研究は各国において個別に進められているのが現状である。これらの国々の研究を横断して結び付けることで、通時的な漢字音の変遷過程の比較研究、また現代東アジアの各漢字音を横断した共時的な対照言語学研究も可能となるのではないかと。

2. 研究の目的

本研究は、上記「日台大辞典緒言」における東アジア漢字音の対照研究について検証し、それを現代にも通用する日本漢字音、韓国漢字音、台湾語音の対照資料として完成させ、そこから通時的な漢字音変遷の比較研究を行うことを目的とする。そのために、まず「緒言」における東アジア各漢字音（厦門・福州・客人・広州・上海・温州・寧波・南京・北京・朝鮮・安南）に関する対照部分のデータベース化を行う。次に、日本漢字音、韓国漢字音、台湾語音について、J. MacGowan *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect*（『英厦辞典』）、C. Douglas *Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy*（『厦英辞典』）、H. A. Giles *A Chinese English Dictionary*、S. W. Williams *A Syllabic dictionary of the Chinese Language*（『漢英韻府』）等、「緒言」が典拠とした文献との照合を行う。これらを通して、この「緒言」の対照研究の有用性について検証する。そしてこのデータベースに、上記の小倉（1995）（2014）、佐々木（2009）、河野（1968）、伊藤（2007）、王（1987）といった、日本呉音、日本漢音、朝鮮漢字音、台湾語音に関する先行研究の成果も当てはめることで、現代にも通用する漢字音対照研究の資料として完成させる。

この漢字音対照資料をもとに、日韓台の漢字音変遷に関する記述を行うことで、通時的な漢字音変遷の比較研究を行う。そして普遍的な漢字音変化メカニズムの理論化を試みる。

3. 研究の方法

・令和3年度

(1) 「日台大辞典緒言」における、東アジア各漢字音（厦門・福州・客人・広州・上海・温州・寧波・南京・北京・朝鮮・安南）に関する対照部分（全141ページ）を、Microsoft Excelに入力することにより、データベース化を行う。

(2) 上記(1)で作成したデータベースのうち、日本漢字音、韓国漢字音、台湾語音について、「緒言」が典拠とした文献との照合を行うことで、その対照研究の有用性について検証する。

(3) 上記(2)を研究分担者、韓国および台湾の研究協力者に示し、知見を得る。

・令和4年度

(1) 前年度(2)で作成したデータベースに、小倉(1995)(2014)、佐々木(2009)、河野(1968)、伊藤(2007)、王(1987)といった、日本呉音、日本漢音、朝鮮漢字音、台湾語音に関する先行研究の成果を当てはめることで、漢字音対照研究の資料として完成させる。

(2) 上記(1)で完成させた漢字音対照資料をもとに、研究分担者とともに、日韓台の漢字音変遷に関する記述を行うことで、通時的な漢字音変遷の比較研究を行っていく。

(3) 上記(1)および(2)の成果について、韓国および台湾の研究協力者に示し、知見を得る。

(4) 上記(1)で完成させた漢字音対照資料は、インターネットで公開する。

・令和5年度

(1) 前年度(2)に引き続き、研究分担者とともに、日韓台の漢字音変遷に関する記述を行うことで、通時的な漢字音変遷の比較研究を行う。そして漢字音変化メカニズムの理論化を試みる。

(2) 上記(1)までに得られた成果について、韓国および台湾の研究協力者に示し、知見を得る。

(3) 以上の成果をまとめて、国内および韓国、台湾の学会で発表し、知見を得る。

(4) 上記(3)で得られた成果をもとに、学術雑誌に投稿する。

4. 研究成果

・令和3年度

「緒言」における東アジア各漢字音（厦門・福州・客人・広州・上海・温州・寧波・南京・北京・朝鮮・安南）に関する対照部分（全141ページ）をMicrosoft Excelに入力することにより、データベース化を行った。

そして、このデータベースをもとに、「緒言」の日本漢字音、韓国漢字音、台湾語音について、J. MacGowan *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect* (『英厦辞典』)、C. Douglas *Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy* (『厦英辞典』)、H. A. Giles *A Chinese English Dictionary*、S. W. Williams *A Syllabic dictionary of the Chinese Language* (『漢英韻府』) 等、「緒言」が典拠とした文献との照合を行い、この「緒言」の対照研究の有用性について検証した。

これに関連して、台湾語の対照資料として活用する予定の王育徳(1968)『ピン音系研究』(王1987『台湾語音の歴史的研究』所収、第一書房)について、検証を行った。また、対照資料の検証の一環として、日本漢字音の複層性に関する研究も行った。

・令和4年度

台湾・台南で開催された「第十四届台湾語言及其教學暨台灣學「蛻變的聲音」國際學術研討會」(2022年8月27・28日)で口頭発表を行った。その際、『日台大辞典』の編纂者である小川尚義における、江戸時代の漢字音研究からの影響関係も重要である、また後世のカーलगレン(B. Karlgren、高本漢)の *Études sur la Phonologie Chinoise* (『中国音韻学研究』) との影響関係についても、考察すべきであるとの指摘を受けた。それらの知見を承けて、今年度はデータベースに上記文献の内容を追記するとともに、「緒言」がやはり典拠としていた江戸時代の太田全斎『漢呉音図』の内容も追記した。またカーलगレン『中国音韻学研究』との対照も行った。

・令和5年度

日本語学会2023年度春季大会(2023年5月21日)にて、「近世日本漢字音研究が近代に及ぼした影響について」と題したポスター発表を行った。そこで、ジャイルズ、「緒言」、太田全斎、およびカーलगレンの影響関係について考察した。またジャイルズが典拠としていた山東直砥『新撰山東玉篇英語挿入』との影響関係についても指摘した。

これに加えて、韓国・慶熙大学校で開催された韓国日本学会第107回国際学術大会(2024年2月16日)にて、「ジャイルズおよび『日台大辞典』の朝鮮漢字音について」と題した口頭発表を行った。そこで、ジャイルズおよび「緒言」の朝鮮漢字音、およびジャイルズが典拠とした『全韻玉篇』との関係について考察した。そこで、東アジア各地域の漢字音のアルファベット表記には揺れが認められ、今後の研究対象となるとの認識を得るに至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中澤信幸	4. 巻 19
2. 論文標題 王育徳のピン音系音韻体系再考 『ピン音系研究』第3章	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山形大学大学院社会文化創造研究科社会文化システムコース紀要	6. 最初と最後の頁 pp.25-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 中澤信幸
2. 発表標題 王育徳のピン音系音韻体系再考 『ピン音系研究』第3章
3. 学会等名 天理台湾学会第30回研究大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中澤信幸
2. 発表標題 關於明治時期的東亞漢字音對比研究的檢查和證實
3. 学会等名 第十四屆台灣語言及其教學暨台灣學「蛻變的聲音」國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石山裕慈
2. 発表標題 漢字音の複層性をめぐって 日本漢字音の特質
3. 学会等名 第2回全南大学大学院国語国文学科BK21国際学術大会 地域語文学×公共実践×コミュニティ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中澤信幸、石山裕慈、岩城裕之、加藤大鶴
2. 発表標題 近世日本漢字音研究が近代に及ぼした影響について
3. 学会等名 日本語学会2023年度春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中澤信幸、宋在漢
2. 発表標題 ジャイルズおよび『日台大辞典』の朝鮮漢字音について
3. 学会等名 韓国日本学会第107回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 陳麗君主編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 成大出版社	5. 総ページ数 534
3. 書名 多聲道的台灣共同體 跨語域交織的主體性和創造性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Nobuyuki NAKAZAWA Website http://www7b.biglobe.ne.jp/~nob_nakazawa/ データベース等の研究成果を、このwebページにて公開している。</p> <p>第十四屆台灣語言及其教學暨台灣學「蛻變的聲音」國際學術研討會/多聲道的台灣共同體 https://chass.ncku.edu.tw/p/412-1011-27963.php?Lang=zh-tw 台灣・國立成功大學人文社會科學センターと台灣語文學會の共催で、「多言語台湾コミュニティ」に関する国際学会を開催した。構造言語学、社会言語学、語用論、認知言語学、教育心理学、さらに分野横断的な立場から、多言語コミュニティの将来における持続可能な共生に向けての研究発表を行った。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石山 裕慈 (ISHIYAMA Yuji) (70552884)	神戸大学・人文学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	岩城 裕之 (IWAKI Hiroyuki) (80390441)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授 (16401)	
研究分担者	加藤 大鶴 (KATO Daikaku) (20318728)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	陳 麗君 (Tan Le-kun)	台湾・国立成功大学・文学院・教授	
研究協力者	宋 在漢 (Song Jae-han)	韓国・東豆川外国語高等学校・日本語科・教諭	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域 台湾	国立成功大学			
韓国	東国大学校			